

芸術表現と場の研究

—歴史的建造物を現代芸術表現の場とするための基礎調査と実験—

「都市の成熟と芸術の役割」関連研究

芸術学部講師 伊東敏光

人々が生活を営むあらゆる都市には、都市としての歴史があり、街のあちこちにその痕跡がのこされている、それが繁栄の証であったとしても争いの爪痕であったとしても、いずれにしても現在の都市がその歴史的事実の積み重ねによって存在していることは確かである。今日のようにあらゆる価値が疑問視され、問直されている時代にあって、この歴史の痕跡を芸術表現の要素としていくことは、新しい芸術観の構築を期待されている現代の美術にとって大きな意味を持つであろう。

本研究の目的は、芸術作品とそれを展示し鑑賞する「場」との関係を探り、現代における芸術の効果的な表現空間を提案するというものである。芸術作品が鑑賞者の心を動かし、ある感動を与えるとき、作品と鑑賞者の間には芸術的感動に至るある種の関係が成立していることになる。その関係を繋ぐものとして、かつては宗教やイデオロギーといった共通の価値が前提として存在したが、個の世界観の表現としての役割を担うようになってきている今日の美術は、ある意味で作品と鑑賞者を繋ぐものを失いつつある。本研究においてはそれを繋ぐものとして「場」の存在に注目し、現代芸術と「場」の関わり方、その必要性、可能性を具体的に考察していく。

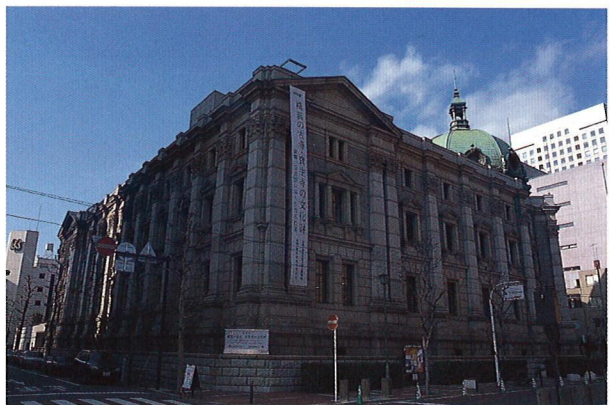
本研究では広島市に残された歴史的建造物の現状調査をおこない、海外を含めた各都市の事例調査を基に、建物の利用についての提案をおこなうこととした。まず研究対象としたのは広島市中区袋町の旧日本銀行広島支店である。1936年(昭和11年)に完成したこの建物は、昭和初期の建築様式を伝える建築物であり、端正な石造りの外観をもつほか、営業室として使用されていた二層吹き抜けホール空間を中心に、その時代の雰囲気をよく残す子部屋群、銀行特有の大きく頑丈な地下の金庫室などの内部空間で構成されている。この時代の銀行建築としては比較的質素で規模もあまり大きなものではないが、芸術作品の展示やコンサートを行うことを想定してみると、吹き抜けホールの空間を中心にその許容範囲は広く、あらゆる可能性に対応できる要素を持っている。事実この時代の銀行建築は保存され、博物館や美術館として再生利用されている例が非常に多い。

例えば現在の神戸市立博物館は、1935年に横浜正金銀行神戸支店として建てられ、1982年に博物館としてオープンしている。博物館としての機能を充実させるため、旧館の床面積6000m²に対し、約4000m²の新館を増築し、恒温恒湿の

収蔵庫、特別展示室、講堂、搬入搬出の動線等はすべて新館内で処理できるようにした。博物館の展示は、常設展示以外にも年間3~4回の特別展が開催されている。また各種の普及活動にも力をいれていて、講演会、映画会、教養講座など文化的で多彩な企画事業も行っている。特に1階大ホールで定期的に行われる「ミュージアムコンサート」は、夕刻のたそがれ時に博物館を市民に解放するもので、室内楽を中心としたコンサートは年間20数回を数えるが、勤め帰りに立ち寄れる便利さもあって、絶えず満席となり好評を博して



神戸市立博物館



神奈川県立歴史博物館

いる。神戸市立博物館は旧建物の魅力を最大限残し、歴史的建造物を街づくりの中に生かした先進例として各方面から高い評価を得ている。その他にも1967年に開館した神奈川県立博物館(1995年より神奈川県立歴史博物館)は、旧横浜正金銀行本店(1904年築)を博物館として転用し、神奈川の歴史と文化を展示物を通して紹介している。また京都文化博物館は、1988年に新築された本館に旧日本銀行京都支店(1906年築)を展示物の一つとして組み込み、総合的

な文化博物館として市の指定する歴史的界隈景観地区の中心的存在となっている。平成6年に開館した佐倉市立美術館は旧川崎銀行佐倉支店(1918年築)を、美術館のエントランスホールとして保存、活用したものである。

本研究者は上記の例を実地で調査し、旧日本銀行広島支店と比較してみた。まず、上記の例において共通していることは、神戸市立博物館の場合は旧外国人居留地区、神奈川県立歴史博物館は伝統建造物保存地区、京都文化博物館は歴史的界隈景観地区、佐倉市立美術館は佐倉市文化・歴史ゾーンといったように、ある時代の建造物や街並が残されている区域全体を、文化ゾーンとして整備しようとしている点にある。博物館や美術館はその計画中の目玉として、また歴史と文化のシンボルとして保存、再生された。その点で比較してみると、旧日本銀行広島支店の建物がある広電宇品線電車通り東側も、1960年頃までは多くの金融機関(芸備銀行本店、住友銀行広島支店、安田生命広島支店、明治生命広島支店、広島富国館)が立ち並ぶ、広島の金融、ビジネスの中心であり、もし原爆による被害がなく地区全体に戦前の雰囲気が残されていれば、他地域と同じような形で、歴史的建造物の保存と街並の再生が大きく叫ばれていたことは間違いなかったであろう。しかし被爆後修復されたこれらの建物も1960年～70年頃ほとんどが解体され、現存するのは旧日本銀行広島支店のみとなってしまう、神戸市や横浜市のように、歴史的建造物の保存、再生を中心とした地域全体の景観整備を進めることは非常に困難となってしまった。

また建物内部での展示物についても、神戸市立博物館の場合は、以前からあった南蛮美術館と考古館という市立の博物館を統合するかたちで設立されたため、地域の歴史と文化を伝える集藏品が開館時からかなり充実していた。例にあげた他の博物館(美術館を除く)も設立の前提として、地域の歴史的文物を展示公開するための施設としての役割を持って設立されている。この点についても、広島では被爆した1945年以前の物があまり残っておらず、残った数少ない物も平和記念資料館の展示物に象徴されるように、広島が経験した被爆という事実を物語る証としての意味を強く持っていて、他都市のような意味合いの展示物は広島では集めにくい。

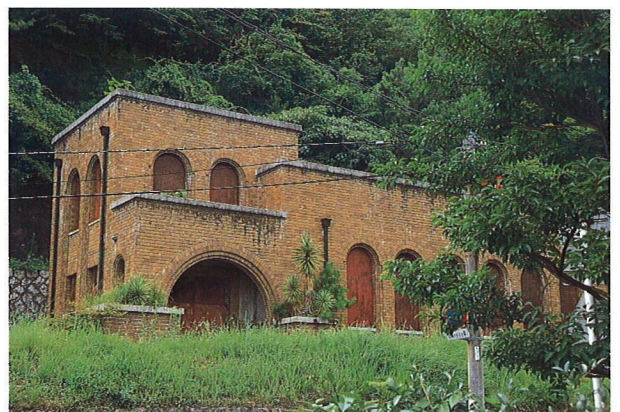
他都市と広島と比較した際、このような現存する建造物や文物の量の違いだけでなく、そこに住む人々が、歴史的建造物の保存、再生を求める目的とその背景に大きな違いを感じる。他都市における歴史的建造物の保存、再生の気運は、古き良き時代の雰囲気を現代の市民生活のなかに蘇えらせ、文化的で豊かな都市環境の充実を図ろうとするところから出てきたものであった。一方現在広島で議論されている歴史的建物の保存問題は、被爆という歴史的事実を物語る証として、原爆ドームや平和記念資料館の展示物と同じ趣旨に基づいて保存が検討されている。

本研究者は「歴史的建造物をいかに現代芸術表現の場とするか」という観点から実際に先例のある各都市を訪れ、調査、研究を進めてきた。そこで感じたのは、歴史的建造物を中心とした文化的でエキゾチックな雰囲気が、現代の都市生活に彩りと活力を与えているという点であったが、そこに再現されている歴史や文化は何かリアルさに欠けているという印象をうけた。歴史的建造物を利用した博物館展示にしてもその界隈の整備にしても、古き良き時代の文化を伝えるには、豊かさと同時に当然抱えていたであろうその時代の苦悩や矛盾はあまり映し出されず、現代から見た過去をテーマパーク的に再現しようとしているように感じた。

このような見方からすれば広島の現在の状況は決して悲観的なものでも無いかもしれない。確かに残っている建造物は少なく、被爆建物という特別な意味を持ってしまっているが、そのために他都市のようなテーマパーク的発想が入り込む余地がなかった。広島に残っている歴史的建造物は、変化を続ける都市の中であって歴史の痕跡を今もしっかりと残している。



旧日本銀行広島支店



己斐調整場送水ポンプ室

本研究では旧日本銀行広島支店以外の歴史的建造物についても現状調査を行ったが、ほとんどの建造物は老朽化が進み、保存するか、解体するかという選択を迫られている。その中で「歴史的建造物を芸術表現の場とする」という目的に対応できそうな建築規模と内部空間を持つものは、広島

陸軍被服支廠、広島大学旧理学部一号館(広島文理科大学)、平和記念公園レストハウス(燃料会館)、広島電鉄千田町変電所、己斐調整場送水ポンプ室ぐらいいしか残っておらず、ほとんどが被爆建物の保存対象として現在検討がなされているものばかりである。

海外における事例は、スクリュー工場を改装したハンブルク大学・演劇・音楽・映画学部、アールヌーボー建築を改装したブリュッセルのMuseum in Warenhaus Waucquez、駅を美術館にしたパリのオルセー美術館、ロンドンのホワイトチャペル美術館ギャラリー、パルマのパラッツォ・デッラ・ピロッタ国立ギャラリー、バルセロナのカタルーニャ美術館、その他アーヘンの傘工場をギャラリーにした例、ウイーンの郵便貯金局をギャラリーにした例等々、資料調査を進めたが、その事例の多さと規模に驚かされた。しかしヨーロッパの古い街は、建造物のほとんどが我々が日本でいう歴史的建造物であり、それを保存し、利用して行くことが当然の事だという認識の基に行われていることを想えば、事例が日本とは比べものにならないほど多いのも当然かもしれない。海外の事例には規模の面からも、社会的背景からも重要な例が多いが、資料による調査だけでは、建造物の持つ風格や都市の雰囲気といった現場での感覚を重要な要素として出発した本研究において、実地調査なしではどうしても限界があり、現時点においてこれら海外の事例を資料によって論ずるのは避け、公開可能な資料として留めておくこととする。今回はこの資料の中から、ロサンゼルス「テンポラリー・コンテンポラリー」とロンドン「テイト・ギャラリー・オブ・モダンアート」について簡単に紹介しておく。

1984年のロサンゼルスでは翌年のロサンゼルスオリンピックに合わせ、現代美術館のプロジェクトを進めていたが、オリンピックまでに完成できないことが明らかとなり、急遽仮の現代美術館として近くにあった旧倉庫をかなり低い予算で改装しオリンピックに間に合わせた。ところがこの仮設美術館が、現代芸術の大規模で実験的性格の強い作品の展示と調和する美術館として大成功を収め、その後予定されていた現代美術館が開館されたにもかかわらず、現在もアメリカを代表する美術館の一つとして多くの市民に親しまれ、そのフレキシブルな展示が常に注目されている。これによってロサンゼルス現代美術館は広く世に認められた作品を、現代美術館の別館となったテンポラリー・コンテンポラリーはより現代的で実験的な作品を扱うことで双方の機能がさらに充実したものとなった。

次に、完成事例からではなく、現在進行中の「テイト・ギャラリー・オブ・モダンアート」のプロジェクトに触れておきたい。

昨年開館100周年をむかえたテイト・ギャラリーは、国の所有する16世紀以降のイギリス美術とヨーロッパを中心とする近、現代美術というふたつの方針にそって作品を収集しているが、2000年に新ギャラリーを開館することで時代やジャンル

による作品の棲み分けをはかり、16世紀から現代までの英国美術はこれまでのギャラリーで、20世紀以降の国際的な視点から収集した現代美術は「テイト・ギャラリー・オブ・モダンアート」で展示する。テムズ川の川岸に誕生する新ギャラリーは、1947年から1963年の期間に建設された火力発電所の巨大な建物を国際的な現代美術館として再生させる案だが、煙突をそのまま残したり、発電所のタービンがおかれていたスペースをそのまま展示室にするなど、現存する建物に手を加えるのは極力最小限にとどめながら、さまざまなジャンルの現代美術を展示できるように改装している。20世紀の発展を支えた火力発電所を、20世紀の美術作品とともに保存し、次世紀の芸術を世界的視点からコレクションしていくためのミュージアムである。作品の展示方法としては、スペースを完全に固定してしまうような作品は持たず、キュレーターの創造力によって、さまざまなジャンルの作品を展示できるようにしていく方針だという。



2000年開館予定
テイト・ギャラリー・オブ・モダンアート
現在改装工事中

本紀要「都市の成熟と芸術の役割No.2」の中でも触れているが、本研究者が旧日本銀行広島支店の建物から最初に感じたのは、現代建築では持つことの出来ない歴史の積み重ねによる強い存在観と、それに自分自身が対峙した時の緊張感であった。その存在に対する畏怖心や緊張感こそが次代の価値観や美意識を正当なかたちで育むものであろうし、またその場で「芸術活動」という社会通念や既存の枠組みに支配されない自由な創造的行為を行う事こそが、旧日本銀行広島支店の建物が持つ、存在の意味を最も有効に引き出せるであろうという想いであった。調査のため実際に広島の歴史的建造物や他都市の実例を見て歩き、また海外の例を調べるうち、「歴史的建造物を現代芸術表現の場としたい」という想いは一層強くなってきている。

21世紀を目前にし、近年世界中で大型の現代美術館の開館、改装が相次いでいる。20世紀という時代は、社会システム、テクノロジー、思想などあらゆるものの変化が急激に起こり、芸術の表現も芸術そのものの意味も激しく変化してきた。世紀末を向かえた今日、この時代をどう捕えどのような方法

で次の世紀に伝えてゆくのか、最近の相次ぐ新美術館開館の背景には20世紀の総括的意味が大きく含まれている。

広島に歴史的建造物が経験した原爆投下という20世紀に起こった一つの大きな事実は、これからの私たちの在り方を決める上での重要な規範としなければならない。既存の概念に囚われない新しい芸術や思想が発生する場に必要なのは、その場で表現行為を行うもの個人個人が持つ、過去の事実を踏まえた強い精神的基盤である。冒頭で述べた「作品と鑑賞者の関係を繋ぐもの」という視点からも、広島に歴史的建造物を再生した「芸術表現の場」が誕生することは、現在世界の多くの都市が莫大な予算を使って進めている美術館のプロジェクトの中にあっても、究めて重要な意味を持つことになるであろう。

本研究では多くの実例調査と関係資料を集めることが出来た。今後海外事例の実地調査も含め調査研究を進めていくが、実例の資料及び情報の提供等、研究に対する協力を各方面にお願いしたい。また資料や調査結果については問い合わせに応じて常時公開を行うこととする。具体的には関連研究「都市の成熟と芸術の役割」における実験展示によって、芸術表現と「場」のあり方を探り提示していく。

参考文献

- 公共建築第33巻第1号通巻129号／平成3年6月／社団法人営繕協会
- 新しい美術博物館／ジュゼップ・マリア・モンタネル／1991年10月／現代企画室
- 美術手帳752号／1998年2月／美術出版社
- ヒロシマの被爆建造物は語る／1996年3月／広島平和記念資料館